

---

# にわか雨

稗田東夷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

にわか雨

### 【Zコード】

Z8963D

### 【作者名】

稗田東夷人

### 【あらすじ】

戦後間もない田舎を舞台にしたお話です。女の子にスカートめぐりをして、泣かせちゃつたことがある・元悪童の皆様にささげます。

春エロス2008出品作品

薄暗い杉林の中、下草の羊歯を蹴って信一郎は恵子の手をとつて走った。夏のにわか雨は一度は樹幹に落ちて溜まり、そこからびしやびしやと容赦なく一人の上に落ちてきた。遠かつた雷鳴も背後に迫っていた。恵子の白いワンピースが水を吸って華奢な体に張り付いていた。もとよりこのような山の中には向かない服が水を吸つて重く、ひどく走りにくそうだった。にわか雨の雨水は冷たい。さつきまで木々の間にたまつた湿気と蒸し暑さでまといつていた体がたちまち冷えてしまった。信一郎は息を切らしての後からついてくる恵子の小さな手の暖かさが心地よかつた。突然林が途切れ、二人は崖に突き当たった。突然立ち止まつた信一郎の背中に恵子がぶつかって小さな悲鳴が上がつた。そこだけ木が切られて開けたその崖の下に半円形の横穴が口を開けていた。どうやら、掩体壕らしいその横穴に信一郎は恵子の手を引いて駆け込んだ。

九十九里浜から上陸してくる連合軍に備えて信一郎たち学童まで連日、教練に借り出されていたのは昨年までのことで、終戦から丸一年、この産業といえど漁業と林業しかない海辺の寒村も元の静けさを取り戻していた。ただ買出し列車に乗つて背嚢に着物や洋食器などを詰め込んでは食料と交換に来るカーキ色の国民服の人々がまだこの国が混乱のさなかにあることを思い出させるのだった。身近なところでの多少の身辺の変化といえば、中央幼年学校の星の生徒を目指して受験勉強に励んでいた信一郎が受験勉強から開放されたことだった。瑣末なことなならば連合国軍総司令部が矢継ぎ早にやる教育の改変で、自由研究などという聞きなれないものが夏休みの課題に加わったことだった。自分で課題を考えるという慣れないう課題に戸惑つた信一郎だが、兄の書架で偶然にシダ類の図鑑を見つけ、いくつか植物の標本を作つてこの課題を済ますことにした。その植物採集についてきてこの災難にあつた恵子だった。信一郎は

新制中学校の男女共学化に間に合わなかつた最後の学年にあたつた。壕の中に駆け込んだ二人は並んで仰向けにひっくり返つてしまつた。ベトンで固めたアーチ状の天井に一人の荒い息使いの音が跳ね返つた。気管に唾が入つたのか恵子が小さくむせた。やつと恵子を気遣う余裕ができて、信一郎がよろりと体を起こした。恵子のほうは仰向けになつたまま目を閉じていた。外はすさまじい雷雨になつて真昼といふのに厚い雲の下は暗かつた。稻光とほぼ同時に大きな雷鳴が響いた。恵子がおびえて胸の前で両手を握り締め、小さな体を強張らせた。信一郎が恵子の傍らにじり寄り、そつと手のひらを腹の上に乗せた。体に張り付いたワンピースは雨水をたっぷり吸い込んでいたが、その水も恵子の体温で幾分ぬるくなつていた。信一郎の手の暖かさも恵子に伝わつたらしく、仰向けに寝て、手は胸の前で握つたままの姿勢だつたが、恵子の強張っていた体から力が抜けて、浅く早かつた呼吸も穏やかになりつつあつた。

昭和二十年の三月に東京が焼けた。サイパン島を陥落させた連合軍はその飛行場から出撃する爆撃機で日本の都市を人口の順に焼け野原にえていた。恵子はここに疎開するまでは横浜で女学校付属の学校に通つていたといふ。この田舎なら尋常科の最後の歳に父親を任地である海軍工廠に残して母子一人で疎開してきた。一目でわかる地元の娘たちとは違つ風体に地元の悪童どもは好奇の目を向けた。恵子も無論、周囲に溶け込む努力はした。マッシュルームと言われるよう丸く刈りそろえたモダンな髪型もおかげで頭に変えてしまつた。戦時下だつたから、皆と同じように墨染めのもんぺ姿ではあつても、すらりとした細身の体でしなやかに歩く姿はどうしても人目を引いてしまうのだった。学校へ行つても、最初こそ早くなじもうと地元の子が輪になつてしまつてしゃべつてゐる中に加わらうとしたようだつた。ところがこの田舎で『女学生の友』などという雑誌を読む者は一人もなく、話題はまるで合わなかつた。半月もすると、休み時間は教室の隅の机に座つたまま一人でたたずむのが恵子の定位置となつてしまつた。都会的といえれば恵子の母もこの田舎の婦人

たちとの付き合いは気苦労が耐えなかつたようだつた。漁師など男が家を空ける仕事の多いこの一帯は昔からかあ天下で通つていた。女がたくましいのは良いのだが、気が強く、時としてそれが粗雑ともとれるのだつた。戦争が敵による一方的な打撃という様相を呈し始めた春、夕暮れになつても恵子の家からは夕食の支度をする煙が上がらないことをいぶかしんだ信一郎の母が勝手に玄関を開けた。道を挟んで向かい同士なのだから田舎ではこれくらいのことは普通だつたが、いきなり踏み込まれた都會育ちの母子は大いに面食らつたといつた。信一郎の母は恐縮する母子を半ば強引に自宅に引っ張り込み、家族を同じぢやぶ台を囲んで座らせた。信一郎の実家は大工だつたが、兼業農家でもあり、飯に混ぜる芋の量次第でこのつつましい親子の食べる分程度は捻出できた。

雷鳴は遠のきつつあり、西に向いて口を開いた壕の中も幾分明るくなつてきた。壕の奥に膳をしつらえたように木の葉や欠けた茶碗が並べられ、小石の類が乗せられていた。どうやら子供の遊び場になつていて、ままごとをやつた跡らしかつた。棕櫚の葉の上に並べられた石の中の一つに信一郎は目をとめた。座つたまま体をねじつて信一郎がそれを手にとつてみると、思つたとおり、見事な石の矢尻だつた。後に成田空港建設をめぐつて激しい政治運動の舞台になる地域はここからそう遠くない。その近辺に貝塚など遺跡が点在するのだつた。造成に使つた土砂の中にでも紛れ込んだが、何かの拍子にこの矢尻がここまで運ばれて、村童がままごとに使つていたようだつた。この矢尻が作られたころなら、今、信一郎がいるこの場所は海の底のはずだつた。この上質な黒曜石は遠く海路で讃岐地方から運ばれてきたといつた。信一郎はそつとその矢尻の縁を指の腹で撫でてみた。少なく見積もつても一千年は土中にあつたその矢尻はまだ鋭さを残していた。

信一郎の家で夕食をとるようになつてから、西の縁側に座つて雑誌を読むのが恵子の日課となつた。この田舎にまで灯火管制がしかれ、日が落ちれば居間に布の囲いをつけて吊るした裸電球のほか明

かりはなくなってしまったのだった。徐々に弱くなつていく西口の明るさを惜しむように恵子は半年も前の雑誌を繰り返し読んだ。この田舎で『少年俱楽部』のような雑誌を置いてある家はまずない。信一郎がそんなものを持つてているのは、市ヶ谷台に奉職していた兄が送つてよこしたものだった。戦局の悪化とともに大本営が地下に移り、雑誌を送つてくれなどとねだれる状況ではなくなつた。それで、恵子は男子向けの漫画などを不平も言わずに読み返すのだった。裸電球一個の薄暗い夕飯の席で信一郎は宝塚の話題などを恵子に振つてみた。とたんに恵子の表情が明るくなつた。無論、信一郎にとっては雑誌の記事で読んだきりの聞きかじりだった。押し黙つたまま芋が半分ほども混じつた飯を食べていた恵子がその日から少しづつしゃべるようになつた。帝劇や映画の話など信一郎にとっては聞きかじりの知識を総動員して話を合わせるのがやつとだつたが、寂しそうに黙つていた恵子が自分から話し始めてくれただけでも信一郎はうれしかつた。恵子が信一郎の言葉に愉快そうに笑うようになるまで時間はかからなかつた。恵子は軽く握つた拳を口元に当ててくすくすとわらつた。笑う姿まで普段から見慣れた娘たちとは違ひ涼やかだと信一郎は感心するのだった。いつ頃からか、恵子が縁側ではなく受験勉強をする信一郎の後ろで雑誌を読むようになつた。勉強の邪魔にならないようページをめくる音にまで気を使つくらいいなら縁側のほうが明るいし涼しいと何度も言おうとした信一郎だが結局やめた。恵子が近くにいるだけで狭い勉強部屋も居心地がよく感じるのだった。

壕の入り口から光が差した。雷鳴も遠くへ去つた。仰向けに寝ていた恵子が薄目を開けると、ちょうどすぐ脇で信一郎がずぶぬれのシャツを脱いだところだった。見ては悪いような気がして恵子は目を閉じた。そんな恵子に気づかず、信一郎は脱いだシャツを絞り、それで坊主頭をごじごじと吹くと、一度はたいてまたそれを着た。ぬれたシャツは気分のいいものではなかつたが、恵子の前で裸でいるのがなんとなく恥ずかしかつた。壕の入り口から差し込む光が

ねむ多様に横たわる恵子の体に注いでいた。張り付いたワンピースは透けて、肌の色が透けていた。細身ではあっても女らしくなりつあるからだの形がはつきりと見えた。何をしようとした決めていたわけではないが信一郎は思わずそっと手を伸ばしそうになつたとき、恵子が突然くしゃみをした。信一郎のあまりの狼狽振りに恵子がこちらこりと笑つた。信一郎が憮然とした表情をしたのは無論、照れ隠しだつた。恵子はひとしきり笑つて目じりにたまつた涙をぬぐつた。

「ねえ？くしゃみそんなに大きかつた？」

恵子が言った。聞かれて正直に答えるわけにはいかず、信一郎は困つた。顔を赤くして照れて頭をかいていた信一郎に恵子は微笑んだ。こづして穏やかに笑つている恵子を見るのは好きな信一郎だつたが、年下の少女にあしらわれているような気がして、癪ではあった。

「もう少し休んでいい。」

信一郎はなるべく平静を装つて言った。存外素直に恵子は目を閉じた。恵子は女らしい括れができ始めた腹の上で手を組んで、穏やかに眠つてゐるようだつた。穏やかな呼吸に合わせてまだふくらみの目立たない胸が上下していた。信一郎はそつと恵子のワンピースの裾をつまんだ。村の悪童の中には娘たちの襟に蛙を投げ込む悪戯などをやる者がいる。やられた娘たちが悲鳴を上げて帯を解いて背中の蛙をとろうとする様を見ては笑うのだつた。信一郎はその程度の悪戯のつもりで少し恵子を驚かせる気だつた。するとするとスカートの裾を持ち上げても恵子はおだやかに寝息のような呼吸をしていた。恵子が飛び起きるとばかり思つていた信一郎はやめるきっかけを失つてついにスカートを捲り上げてしまつた。恵子の履いていた下着は馴染みのある提灯のようなズロースではなかつた。ぬれて透けていたスカートの上から大体の形は想像できていたが、純白のそれは小さな三角形をしていた。進駐軍が持ち込んで捨てたものの中に下着姿のピンナップ写真はあり、学校で顔を合わせる悪童どもの中にはそれを隠し持つてきてこそそと見てはいる連中がいた。そんな悪

童どもとは連中で口ごも付き合いはない信一郎だが、無論、そのようなことに好奇心がないわけではなく、車座になつている連中の背後からそつと盗み見たことは会つた。胸を露にした西洋の女が履いていたそれと形だけは同じものを恵子が履いていた。

玉音放送があつた日の晩、電球の傘に吊り下げられていた黒い布が取り払われ、家々の窓から明かりがもれた。街では街灯が点いて光があふれているところだつた。家族に軍人がいる信一郎にとつては敗戦はもとより予想していたことだつた。そのころには恵子の母も田舎の水になじみ、近所から裁縫の仕事を引き受けて稼ぐようになつていた。この田舎の女たちがもんべで過ごしているとき、真つ先にスカートを履いたのは恵子だつた。母手製のモダンな装いで、ワンピースの裾をひらひらさせて歩く恵子の姿が信一郎にはまぶしかつた。戦争が終わつた以上、疎開してきた恵子とは別れが近いのだと氣落ちした信一郎だが、いつまでたつても恵子の父は家族を迎えには来なかつた。恵子の父は海軍の技官だつた。工場に来ていた挺身隊の女学生とただならぬ関係になり逃げたのだと妙な噂が立つたこともあつた。実のところ、出張先の台湾からの帰途、潜水艦攻撃によつて戦死していたのだが、恵子もその母も心無い噂に對しても言わなかつた。信一郎も詮索してはならない事情があると察していた。ずっと後になつて、信一郎は恵子の父が関わつていた仕事が特攻専用機、桜花の開発だつたと知つた。母機から切り離されてから口ケットエンジンに点火し、敵艦に突入するよう設計されたこの機体は、占領政策下のプロパガンダもあつて、非人道性の象徴になつていた。

すっかりスカートを捲り上げられてしまつても恵子は無抵抗だつた。丸みを帯び始めたばかりの腰からすらりと伸びた白い脚が壕の入り口からスポットライトのように差し込む光に照らされてまぶしいように綺麗だつた。信一郎に自分の鼓動が聞こえた。晩生の信一郎とて大人の男女の営みがどういうものか概要ならば知つている。その手の事柄に十分な興味もあつた。自分はこの状況に興奮してい

るのかと、そう思つたと単位信一郎の頭に血が上り、顔が熱くほつて口が渴いた。恵子の体を見て触りたいという衝動が抑えがたかつた。信一郎が震える手を伸ばして恵子の履いた小さな三角の下着に手をかけた。震える手でその白い布切れを信一郎はゆっくりと下ろしていった。

「信一郎さん・・・？」

突然名前を呼ばれた信一郎がびっくりとして手を止めた。恵子が胸の前で手も握り締めて、不安そうに信一郎を見ていた。おびえた恵子の目を見てしまい、信一郎はひるんだ。まわらひ頭で信一郎は何か言つべきことを考えた。

「ぐ、軍機につき。詮索無用！」

裏返つた声で口走つたのは、田じりひそかに軽蔑している悪童どもが悪巧みを詮索されたときに使つた常套句だつた。恵子がこくりと小さくうなずいて、かたく目を閉じた。この健気な恵子にしようとしていることを思えば、信一郎の心にも怯みはあつた。それでも信一郎は再び下着に手をかけ、下ろしにかかつた。恵子をひどく傷つけかねないことをやろうとしている自分を信一郎は許した。自分にもこんなするさがあるのかと信一郎は思い、そしてするくもすぐ忘れた。下着の下、つまり自分のものならば男性特有のあの器官がついている場所を信一郎は初めてはつきりと間近で見た。やわらかそうな膨らみに縦に筋が一本入つただけのその形が綺麗だと信一郎は思つた。信一郎がその膨らみに触れようとして伸ばした手が途中で止まつた。信一郎がその膨らみに触れたが、信一郎はその柔らかそうなふくらみの奥、つまり恵子の脚の間にもつと複雑な器官があるとは知つていた。その器官を使って男女が交合するのだと理解はしていた。そこに思い至つて信一郎は急に恐ろしくなつてしまつた。自分とまだまだ縁とおいと思つていた男女咬合のこと、その一步手前まで来てしまつてはいるといまさら氣づいた。これ以上進むのは空恐ろしく、かといって目の前に横たわつた恵子に触れてみたい衝動は抑えがたかった。意を決して恵子に触れようと前かがみになつたとき、

信一郎のズボンの中で強張っているものが何か硬いものと触れた。ポケットに入れておいたあの矢尻だった。すっかりその存在を忘れていた矢尻をポケットから取り出したとき、信一郎がひらめいた。この矢尻で恵子の足の付け根にある柔らかな膨らみにちょっとした悪さをしようと思い立った。罪のない悪戯で恵子に触れられる名案だと信一郎はこの思い付きを気に入つた。何か愉快なたぐらみをするような心地がして、少しは緊張もほぐれた信一郎がそつとその矢尻を恵子のふくらみの中心にある筋に挟んだ。ふつくらと滑らかな丸みから笹の葉を寸詰まりにようやく矢尻が生えたようで、抽象彫刻のような面白い造形になった。矢尻を埋め込んだとき、わずかに触れた恵子の体のはすばらしく柔らかで温かかった。指に残ったその感触を楽しみながら信一郎はしばらくそれを眺めた。恵子の手がそろそろと自分の下腹部に下りてきた。恵子は自分の下腹部に何をされたのか恐る恐る確かめようとしていた。信一郎は恵子の手が自分が埋め込んだ矢尻に触れる瞬間を待つた。跳ね起きた恵子が、悪童に悪さをされた村の娘のように慌てふためくと思っていた。信一郎はきやんきやん子犬が吠えるように自分をなじる恵子の様を思つてほくそ笑んだ。ごく稀に見せる恵子が怒つて膨れた顔が可愛らしいことを信一郎は知つていた。

恵子の指先が硬い矢尻の縁に触れた。

「きや！」

乾いた悲鳴を上げてびくりと全身を痙攣させた恵子が熱いものに触れたように手を引いた。すっかり緩んだ表情でいた信一郎の顔から血の気が引いた。かつと見開いた恵子のおびえた目に涙が溜まつていたからだつた。緊張したときの癖で恵子は胸の前でぎゅっと拳を握つていた。おびえた目で信一郎を見る恵子の呼吸が浅く速かつた。

「うあ！」

大声と同時に恵子は存外な力で信一郎を突き飛ばした。狼狽して尻餅をついたままの信一郎の前で一気に下着を引き上げると、恵子は一気に外へ駆け出した。慌てて後を追おうとした信一郎だが足がも

つれて転び、したたかに横面を打つてしまつた。立ち上がりて壕の外に出たとき、恵子の姿はなかつた。雨の後の杉林は湿氣と熱氣で息が苦しかつた。

夏の太陽もようやく西に傾くころ、信一郎は鎮守の森の前を通り過ぎようとしていた。ここを越えて角を曲がればすぐ家だつた。もちろん信一郎の足取りは重い。日が暮れるまで杉林の中、寄つてくる蚊をたたきながら家に帰るのを逡巡していたのだつた。頭に血が上つた拳句に恵子にしたことはいくら後悔しても足りなかつた。家に泣いて帰つた恵子が当然、母に自分の仕打ちを打ち明けるだろうと思うと信一郎はいつそ死のうかといつ思想だつた。恵子の家は道を挟んで向かいで、しかも母娘がそろつて一緒に夕飯をとる仲だ。恵子が夕食に来なくなつたら、自分の家族は理由を詮索するに違ひなく、信一郎はどう言い訳していいか分からなかつた。それでも信一郎の足を家に向かわせたのはだんだん暗くなる林の氣味悪さに耐えられなかつた意氣地の無さだつた。木々のせいで林の中は早く暗くなつていく。昼間は方々で散つていた鳥がねぐらに戻つてくるようで樹幹が騒がしかつた。物音はしても姿が見えず、一人で林の中にはいると頭上で得体の知れないものに狙われているような心地がした。信一郎は夜中に一人で便所にいけど、家族に呆れられたことと変わらない自分の意氣地のなさを呪つた。どの面下げて帰ろうかと思案しているうちに家は目の前だつた。最後の角を曲がる前に板塀に隠れてそつと様子を伺つた信一郎は胃が縮み上がる思いだつた。自分の家の前で、開襟シャツにもんぺという姿に着替えた恵子と信一郎の母が話しこんいる姿があつた。

「あ！信一郎さん！」

板塀に隠れてこそこそと様子を伺つてゐる信一郎を見つけたのは恵子だつた。恐る恐る恵子のほうへ歩く信一郎の膝が震えていた。母が自分のほうを向いただけで信一郎は心臓が止まる思いだつた。

「あんたねえ、昔からものを失くす子だつたけど、治らないもんだわね！」

首をすくめてびくびくしていた信一郎に向かって母は意外な言葉をかけた。事態が飲み込めずに呆然とした信一郎に、母が何か小さなものを投げてよこした、慌てて捕り損なって、母が投げてよこした小さなものはお手玉するように信一郎の手の上で踊った。信一郎がやっとそれをつかんで手の中のものを見れば黒曜石の矢尻だった。「恵子ちゃんがね、届けてくれたのよ。お礼くらい言つたらどう。」言い終わって信一郎の母は腰に手を当てて大きく息をついた。息子に小言を言つときのいつもの癖そのままだった。

「ねー恵子ちゃん。今日はねお父さんが漁師さんちの仕事でね、お魚もりつてあるのよ。お刺身で食べられるようないいにやつ。今日はお芋の入つてないご飯にしまじょうかね。もつもつと、この馬鹿息子の相手でもしててね。」

信一郎の母は息子に対するのとはうつて変わった優しい言葉で恵子に言つとすたと家の中に入つていた。恵子はにっこりと笑顔で見送つた。家の前で恵子と取り残された信一郎が何か言おうとしたが、その前で恵子がすねたようにふいと横を向いてしまつた。夕日に照らされた恵子の横顔が穏やかに笑っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8963d/>

---

にわか雨

2010年10月11日01時39分発行